

プロジェクトマネージャー：藤井 彰人 PM  
（KDDI 株式会社 ソリューション事業本部 ソリューション事業企画本部 副本部長  
兼 クラウドサービス企画部長）

## 1. プロジェクト全体の概要

従来型のアプリケーション開発手法やテクノロジーだけでなく、新たな情報価値の創造やコンピューティング・リソースの新たな活用方法に注目し、以下のいずれかのテーマに該当するプロジェクトを採択し、グローバルに通用するクリエイタを発掘し育成することを目標としている。

### (1) 情報の「価値」に着目したアプリケーションやサービス

Network 上に広がる様々な「情報」を活用し、新たな「価値」を創造する Web アプリケーション

### (2) クラウドを活用したアプリケーションやサービス

クラウドならではの特徴を活用した、これまでにない Web アプリケーション、またはサービス

### (3) 言語依存度合いの低い、グローバルに通用するソフトウェア、アプリケーション、Web サービス

日本におけるサービスやテクノロジーの特色を生かしつつ、世界に通用するアプリケーション。または、地域、コミュニティ横断的なソーシャルアプリケーション

## ねらい

様々な新規サービスが国内で提案されるものの、グローバルな観点から、開発後の発展性の低いものが数多く見受けられる。本プロジェクトでは、提案そのものの先進性を具現化するだけでなく、未踏プロジェクト以後、ビジネスや海外での展開可能性をさらに広げることに注目して、プロジェクトの運営、クリエイタの育成を行った。

## プロジェクトの評価

今回のプロジェクトでは、3 つのプロジェクトを採択したが、いずれのプロジェクトも公募対象内容のいずれかに合致しており、大変ユニークなプロジェクトである。

- (1) 音声に視覚的特徴を加えて振返りを支援するシステム
- (2) 日本の医療を救う電子カルテ検索システムの開発
- (3) システムソフトウェア開発プラットフォーム

詳細は個別プロジェクト毎に後述するが、いずれのプロジェクトも、キックオフミーティング、ブースト会議、月例・不定期のミーティング、八合目会議（中間全体合宿）、成果報告会等の指導の機会を通して、当初予定していた開発目標を達成し、今後の更なる発展性も高く期待できるものとなった。(1)については、音声での振り返り学習に注目した、非常に実用性の高いアプリケーションであり、音声データ活用の新しい可能性を示していた。(2)については、医学部生による医療業界向け電子カルテサービスであり、IT 活用が遅れている医療ビジネスの現場に変革をもたらすことが期待できた。(3)については、IT ビジネスにおいて今後成長が期待される IoT 分野の開発実行基盤についての提案であり、デバイス上の OS を含む提案は実用的かつ斬新であった。

## 2. プロジェクト採択時の評価（全体）

公募プロジェクトの中から、前述した 3 つの視点に加えて、クリエイタの本プロジェクトにける意気込み、開発体制と開発スキル、今後の発展性の 3 つの視点を加えて、3 つのプロジェクトの採択に至った。

プロジェクトの採択にあたっては、特に提案当初のサービスのアイデアよりも、クリエイタ自身も十分に気づくことができていない、提案の元となるコンセプトや、将来のプラットフォームサービス、技術コンポーネントとしての発展可能性を重視している。採択時には各提案にこの点も評価として加えていることについても触れておきたい。

- (1) 音声に視覚的特徴を加えて振返りを支援するシステム

人々の活動に利用される様々な形のデータ（情報）を、より効率的に生産的に利用しようとすることは、これまで、またこれから IT 分野の最も重要な事柄である。本提案は、音声情報にそのフォーカスをあて、情報をより生産的に活用するサービスの開発を目指すものであった。スマートフォン、クラウドの活用が当たり前になっている現在、ボイスレコーダーを未だ利用する多くの人々に新しい世界を提示してもらいたいと考えた。本システムは U-22 プログラミング・コンテストにて経済産業大臣賞を獲得したアプリであり、未踏期間中にアプリの実用性を磨くとともに、未踏領域へのさらなる成長を期待した。

- (2) 日本の医療を救う電子カルテ検索システムの開発

IT 活用による生産性の向上は、さまざまな業種業態において実現されているが、医療費高騰や医師不足が深刻な医療現場においては、電子カルテの適用を始め様々

な試みがなされてきているものの、他の業種と比較し十分にその活用が進んでいるとは言いがたい。本提案は医学部生による診療情報検索システムの提案であり、様々な医療現場の制約や知識を元に類似患者検索や薬剤応答検索などを実装するものであった。提案者は医療現場を変えようとする情熱に加えて、検索 AI 分野 IT スタートアップ企業でのインターン経験から高い IT スキルも有しており、医療分野での現場感覚を活かして実用性の高いサービスを開発してくれることを期待した。

### (3) システムソフトウェア開発プラットフォーム

ある統計によると、IoT により数年内に自社製品サービスが大きく変化すると答える企業が半数を超える中、国内において実際に取り組んでいる企業は 10%未満であり、さらに成果を出している企業は非常に少ないのが現実である。通信接続を含むセンサデバイス側アプリがサーバ側ソフトウェアのように簡単に扱えないことがその要因とも言われているが、本提案ではデバイス側システムソフトウェアを中心に、IoT サービスを簡単に構築できる開発プラットフォームの提供を目指したものであった。クラウド IoT 時代の新しいシステムソフトウェアのあり方を、開発環境を含めて未踏期間中に提示してくれることを期待した。

いずれのプロジェクトもコアとなるアイデアを重視し、採択後のプロジェクト期間中に、外部有識者からのアドバイスを求める等して、それぞれの課題を解決していく手法をとることとした。

## 3. プロジェクト終了時の評価

本プロジェクトでは、分野の異なる 3 つのプロジェクトを採択したが、いずれもそれぞれの分野において新たなプラットフォームとなりうる内容に仕上がっている。音声に視覚的特徴を加えて振返りを支援するシステム（藤坂 PJ）は、音声による振返り学習に適したクラウド連携スマートフォンアプリ Recoco を開発した。日本の医療を救う電子カルテ検索システムの開発（中野 PJ）は、当初予定していた検索システムのための開発方針を変更し、患者と医師を効率的につなぐチャットボットつき共有電子カルテ「ドクター Q」を開発した。システムソフトウェア開発プラットフォーム（怒田・左野 PJ）は、IoT サービスを簡単に素早く、かつ安価に実現できる IoT 開発実行プラットフォーム MakeStack を開発した。

それぞれのプロジェクトの開発内容や達成度合いには違いはあるものの、当初予定していた以上の成果を上げており、担当 PM としても満足している。個別の評価は個別評価に後述する。提案時の内容から変化しているプロジェクトがほとんどであるが、提案内容の本質をクリエイターとともに見直し、より発展性のある形で再考した結果であることは理解いただきたい。

プロジェクト全体では、進捗ミーティング、合宿等を複数回開催することで、定期的

なフィードバックの場を設けた。これにより、様々なアドバイザーから様々な視点でコメントを頂くことができ、クリエイターには貴重な体験となったであろうと考える。人材育成の視点を持つ現在の未踏プロジェクトにおいては、将来採択するプロジェクトにおいてもこのような機会を提供することはとても重要と考える。